

<b>Title</b>	「豊臣時代大坂城指図」(中井家所蔵)をめぐるノート
<b>Author</b>	仁木 宏, 家治 清真
<b>Citation</b>	都市文化研究. 22 卷, p.66-74.
<b>Issue Date</b>	2020-03
<b>ISSN</b>	1348-3293
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科 : 都市文化研究センター
<b>Description</b>	研究資料
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20200601-004

Placed on: Osaka City University

◇研究資料◇

## 「豊臣時代大坂城指図」(中井家所蔵)をめぐるノート

仁木 宏・家治 清真

### ◆要 旨

豊臣時代の大坂城本丸を描く唯一の正確な絵画史料が「豊臣時代大坂城指図」(中井家所蔵)である。本稿では、この指図のトレース図を作成するとともに、文字表記を忠実に翻刻した。その上で、2種類の指図を比較したり、指図から推定される城郭構造を解読したりすることで、豊臣時代の大坂城の特徴の一端について明らかにする。

キーワード：豊臣秀吉、大坂城、城郭構造、指図、中井家

(2019年8月30日論文受付, 2019年11月8日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

### はじめに—本稿の目的

豊臣時代の大坂城の構造については、同城が落城後、数年の内に地中に埋められてしまったこともあり、不明な点が多い。著名な「大坂冬の陣図屏風」「大坂夏の陣図屏風」などによる復元研究もなされているが、それぞれの屏風の史料としての信憑性についての学問的検証が不十分な現状においては、屏風の描写に多く拠ることは控えるべきであろう。

そうしたなか、中井家(江戸幕府大工頭)が所蔵し、大坂城本丸を平面で描く「豊臣時代大坂城指図」の史料価値については、科学的方法によって検証が進められてきた。すなわち、1960年代以降、現大阪城本丸地区における発掘調査・ボーリング調査などの進展にしたがい、こうした調査で確定された豊臣期大坂城の石垣の場所や標高を「指図」と比較することで、「指図」の正確さが確かめられつつあるのである。石垣の位置について最大で数メートルの誤差が確認されているが、全体として豊臣期大坂城の本丸の形状は「指図」どおりであることはまちがいない。「指図」をもとにして、豊臣期大坂城の構造を復元し、論じることは通説となっている。

私たち大阪市立大学の研究グループでも、2015年以降、スウェーデン式サウンディング調査によって、従来より多くの地点で「指図」の正確さを確認してきた<sup>1)</sup>。

しかし、その一方で、「指図」の歪みが従来想定されていた以上に大きいということや、同じ曲輪においても地表面が傾斜している(高低差がある)可能性が高い、といったことを明らかにしてきた。

こうした経過から研究の現状は、「指図」の正確さを前提としつつも、ズレや歪みも意識し、豊臣期大坂城本丸を、より正確に三次元で復元することに向かっているといえよう。それ故、「指図」の史料としての価値はますます増し、そのことは「指図」の史料批判をより徹底しておこなう必要があることも意味している。

現在、中井家には「豊臣時代大坂城指図」が2葉(甲本・乙本とされている)、所蔵されている<sup>2)</sup>。2葉の内容はほとんど同じであるが、細部には違いも認められる。これまでの研究によって、2葉のいずれもが原本ではなく、別の図面(「元図」)の書写であることがわかっている<sup>3)</sup>。しかし、これら2葉の相互の関係や、いずれが原本(ないし、原本に近い指図)により近いのかといった分析は十分にはなされてこなかった。さらに、「指図」にある約150ヶ所の文字表記について、そのすべてを解読し、「指図」のトレースに貼り込むことで、「指図」を史料として誰もが簡単に参照できるようにする作業もされていなかった<sup>4)</sup>。

そこで、本稿では、「指図」のうち、より原本に近いと考えられる(その根拠は後述)乙本をトレースした。

そして、乙本に記されている文字を、相対的な文字の大きさもできるだけ考慮に入れながら、そのトレース図に貼り付けていった。こうしてできた読解図を、可能な限り大きな版面で示し、今後のさまざまな研究に役立てていただくため、本誌では特別に見開きページで載せていただいた。

さらに本稿では、この甲本・乙本を詳細に検討する中で気づいたことを、まとめて記述してゆく。甲本と乙本の異同やそこから判断される甲本、乙本のオリジナル性、甲本・乙本に共通する元図の性格などである。さらには、「指図」そのものの特色や、そこから導かれる豊臣期大坂城本丸地区の歴史的 성격についても言及したい<sup>5)</sup>。

本稿では、豊臣期大坂城本丸を以下の4地区に分けて説明する。①一番北に位置し、極楽橋で二ノ丸と接続するのが「山里丸地区」である。詰ノ丸にある天守閣の北側直下にあたる。②天守閣を擁し、本丸全体の中心的な地位にあるのが「詰ノ丸地区」である。城内で最高所に位置し、奥御殿(奥向御殿)の建物群が建ちならんでいた。なお、本稿では、「御天守」と3つの「御櫓(矢倉)」で囲まれる狭義の詰ノ丸とは別に、その東・南・西を取り囲む「中ノ段(帯曲輪)」もふくめて「詰ノ丸地区」とよぶ。③その南に位置するのが「表御殿地区」である。表御殿(表向御殿)の建物が多く建っていた。④本丸への南の入口である桜門から、表御殿地区への途中にあるのが「大手地区」である。「米蔵地区」とよばれることもあるが、本稿では、大手にあたる桜門から入ってすぐの重要な区画にあたることを重視した。

以下の本論では、上記の4地区の区割りにしたがって、全体として北から南へ4項目に分け、それぞれ箇条書きで留意点について述べてゆく。

なお、甲本・乙本では、石垣ラインは黒太線、塀や柵の遮蔽施設は赤線で描かれているが、本稿読解図では赤線を破線で表現した。また乙本では、いくつかの建物を橙色に着色しているが、読解図では鼠色に着色して表現している。

また本指図においては、1尺=0.303mであり、1間=6尺5寸=1.97mと考えて計算している。これは発掘調査で確認された石垣の位置や深度から導かれた数値であり、一般財団法人大阪市文化財協会が採用しているこれらの計算法を本稿でも採用する。

## 1. 極楽橋から山里丸地区付近

- ①北側に架かる極楽橋の形状については、甲本も乙本も大差はない。但し、橋脚の形は異なっている。乙本のほうがシンプルではあるが、より現実的な形状ではないか。
- ②山里丸地区は、大きく二つの曲輪からなっていた。地

区の東側から南側に広がる山里曲輪が芦田曲輪より一段高くなっている。極楽橋の南側にある「御門」からは芦田曲輪に入ることになる。

なお、山里曲輪と芦田曲輪の境界ラインの一部(東西方向)の長さを示す「十八間半」という記載が乙本にあって、甲本には欠けている。おそらく甲本の記載忘れであろう。

③極楽橋の南のたもとで、「御門」の東側に、「石垣高三尺」とある。この「石垣」とはどの石垣のことであろうか。芦田曲輪から見てその東に位置する山里曲輪の石垣は、別途「石垣高七尺五寸」とされており、「三尺」よりずっと高い。

甲本・乙本とも、「石垣高□尺」といったタテ書きの文字列があった場合、この文字列が垂直にぶつかる面(「石」の字のすぐ上)にあって、文字列と直角に引かれた線で表現される)の部分の石垣の高さを表現しているのが原則である。しかし、この「石垣高三尺」では、そのような石垣は存在しない。

「御門」が建つ平面から見ると山里曲輪の石垣が「三尺」あったのであろうか。芦田曲輪と山里曲輪の比高差が「七尺五寸」であるので、「三尺」を上記のように解釈すれば、「御門」が建つこの平面は芦田曲輪より4尺5寸高いことになる。こうした想定が正しければ、この平面から芦田曲輪へいたる、描かれた階段は、この4尺5寸(約1.5m)の高さを降りるものであることになる。

④芦田曲輪の西下まで、「下ノ段帯曲輪」がのびてきている。この「帯曲輪」から芦田曲輪へは東向きの階段で上る表現となっている。ただ、「下ノ段帯曲輪」の北端部近くに北向き4~5段の謎の階段がある。

「下ノ段帯曲輪」(標高11m)と芦田曲輪(標高15m)の間には4mの段差があることがボーリング調査などでわかっており<sup>6)</sup>、この比高差を一つの階段で上るのが無理とすれば、まず北から南へこの謎の階段を上り、左へ折れて、芦田曲輪への階段を上ることになる。こうした想定が正しいならば、謎の階段の南側には階段の踊り場にあたる平面が書かれている必要があるが、甲本・乙本とも欠いている。

⑤芦田曲輪からは、その南端で、階段で山里曲輪へ上がり、山里曲輪から西へ登って「中ノ段帯曲輪」にいたる。ここから南へ階段を一つ上ると踊り場があり、その先に「御門」がある。「御門」を抜けてさらに階段を上ると詰ノ丸地表面にいたる、という描写になっている。

甲本・乙本では、門施設を示すため、門柱の位置を示す黒い小丸が記されるのが通例である。ここで、乙本にはこれが記されているが、甲本では「御門」の文字だけで門柱は図化されていない。

これらの一連の階段は、詰ノ丸北西隅に建つ「御矢倉」からすべて見下ろされる構造になっている。また、「御





門」から詰ノ丸に上がる南向きの階段はだんだん狭くなってゆく。さらに、「御門」の南側の石塁（両脇を石垣で固められ、内部に土石を充填している構造物）の上には、「馬乗同心番所」も設けられている。城内には他にこれほど複雑かつ連続する階段はなく、詰ノ丸北西側のこの入口（虎口）が防御にすぐれ、また登城者に対して強い威圧感、城主の威容を知らしめるものとなっている。

⑥以上からわかるように、本丸を北側から来訪する者は、極楽橋を渡って芦田曲輪に入り、その南端から山里曲輪、「中ノ段帯曲輪」を経て、「御門」を抜け、詰ノ丸へと上ってゆく。これが大坂城北側から入るメインルートであった。

## 2. 「御天守」など詰ノ丸付近

①「御天守」の区画の北側のすべてと東側・西側の一部を囲む「コ」字形の区画がある。「御天守」の区画と、この「コ」字形の区画のどちらが高いのであろうか。宮上茂隆は、後者のほうが高いと考えて復元図を描いている<sup>7)</sup>。

しかし、「コ」字形区画にある二ヶ所の「石垣五尺」という文字列は、いずれも「御天守」区画に向けて記載されている。先述したように、タテ書きの文字列が垂直にぶつかる面の部分の石垣の高さについては、文字が書かれている側から見た状況を表現しているのが原則であることからすれば、「御天守」の石垣が高さ「五尺」で積まれていたことになり、「御天守」区画の方が高かったことがわかる。

②「コ」字形区画の西側には、詰ノ丸北西隅の「御矢倉」まで石塁がつづいている。石塁は、「コ」字形区画より一段低かったとみなしてよいだろう。

この石塁の南側すぐに小さな建物がある。「御矢倉」の東側すぐのところである。乙本ではこの建物から北へのびた遮蔽装置（赤線で表現）が土塁の上にもまで到達しているが、建造物のあり方としては考えにくい。甲本ではそのような遮蔽物は描かれていない。他方、「御天守」西側で、南北方向に伸びる遮蔽装置について、甲本ではそれが石塁の上までつづいているように描いているが、乙本ではそこまで到達していない。乙本の表現の方が正確であろう。これらの事例は、元図は正しく描かれていたのに、それぞれ甲本、乙本の筆写の時に誤って赤線を伸ばしたことを示す。

③「御天守」の南側、西側には、何本かの赤線が描かれ、遮蔽物が複雑に造られていたことがわかる。甲本と乙本の描写を比較すれば、乙本のほうがより詳細に描かれているのに対し、甲本は単純化されている。

乙本によると、「御天守」区画の南側の境界の半分く

らいと、西側の境界の一部が赤線になっている。「御天守」は基本的に頑丈な石垣で取り囲まれていると考えられることから、この部分が赤線になっていることは不思議である<sup>8)</sup>。

④「御天守」の東側には「中ノ段帯曲輪」が広がっている。「御天守」の東北側で、「コ」字形区画の東側に、甲本では「石垣高六間」の表記がある。乙本にはこの表記がない。但し、石垣の高さを表現するのは、「石垣高□尺」などという文字を、垂直にぶつかる面に向けて記載するという原則からすれば甲本の表記が本来のものであるか、疑問もある。なぜなら、その少し南側には「石垣高サ六間」という表記が、原則通りの形式で、甲本・乙本ともに記されているからである。つまり甲本が数値の「余計な」書き加えをした可能性があるのである<sup>9)</sup>。

⑤詰ノ丸東端のラインに沿って、「御天守」のすぐ南側に平行四辺形の区画がある。この区画はその南側に長くつづく石塁の区画とは異なる独立した区画であったようである。乙本では、詰ノ丸地表からこの区画に上がる階段が記されている。ところが、甲本では階段は記されておらず、書き洩らしたようである。

なお、この平行四辺形の区画は、詰ノ丸南東隅の「御櫓」の西側に位置する「取付（とりつき）」のような施設であったのだろう。「御天守」の「取付」と推定しておく。

⑥上記の平行四辺形区画（「御天守」の「取付」）から、詰ノ丸南東隅の「御櫓」にいたるまでの石塁には、乙本では5ヶ所、甲本では4ヶ所の階段が記されている。甲本の方が1ヶ所書き洩らしたものと推測される。これらは詰ノ丸地表から土塁にあがるための階段である。

⑦詰ノ丸西側の石塁上では、北端近くの「馬乗同心番所」と、詰ノ丸南西部に近い「御櫓」の間に、甲本・乙本ともに2ヶ所の階段が記されている。

しかし、甲本では、この階段が石塁の西側に書かれている。石塁の階段は、詰ノ丸側から石塁上に上がるためのものであり、甲本のように詰ノ丸の反対側（中ノ段帯曲輪側）に位置するはずがない。甲本は明らかに書き誤っているのである。

⑧奥御殿の建物周辺の赤線（塀・柵）のひき方については、おおむね乙本の方が甲本より丁寧である。ただ、乙本において、詰ノ丸東寄りの東西に長い赤線2本がいずれも土塁の上までそのまま延びているのは事実と異なるであろう。

⑨詰ノ丸地区の南端にある「鉄砲衆番所」の東側に、ほぼ南北方向の赤線がある。赤線の右側に数字が3つあり、北から「十四間」「六間半」「四間」とある。このうち、一番南の「四間」は、すぐ下の、井戸のある区画から屈曲しながら詰ノ丸へ上がる階段の南北幅を示したものであろう。

「六間半」は、他の石垣高の表記方法と同じであるとすれば、この赤線のラインに六間半(12m以上)の高さの石垣があったことになる。そうすると「十四間」がこの部分の石垣の長さということになり、数字としては理解できる。ただ、ここは「中ノ段帯曲輪」の平地がつづいていたはずの地区であり、ここに石垣によるこれほどの段差はありえない<sup>10)</sup>。

そこで一つの可能性を示すならば、すぐ南側の井戸のある曲輪と、「中ノ段帯曲輪」の境界(東西方向)については数字が入っていないので、この部分の長さが「十四間」、この部分の石垣の高さが「六間半」だったのかもしれない。それが、転写の際に北側の遮蔽施設(赤線)にともなう数字表記として誤って移動したのではないか。もし、これが事実ならば、赤線は「中ノ段帯曲輪」の中を区画する塀か柵ということになる<sup>11)</sup>。

### 3. 表御殿地区

①表御殿地区では、北端部周辺の石垣の表記がほとんどないことに注意が必要である。詰ノ丸地区にむかって幅をせばめてゆく巨大な土橋については、西側にも東側にも高い石垣(高さ6~8間)があったはずだが、そのことを示す黒太線や数字が入っていない。特に西側は赤線がひかれ、「へい(塀)」という表記と、その南の赤線に東西方向の「十二間」という長さの表示があるだけである。

東側も、「御蔵」の南端からの東西方向には赤線がひかれているだけであるが、ここも高い石垣であったはずである。そこから南へつづく南北方向については、多聞櫓と思われる建造物が建っている部分には太線は引かれていない。これは、建物の直下にある石垣を黒太線で示すことはしないという原則によるのであろう。しかし、詰ノ丸につながる土橋部分や、表御殿地区の北端の付近は赤線ではなく石垣の表記をすべきであろう。これは甲本・乙本に共通する。

②階段の表記について気づいた点を記す。

乙本では、表御殿地区の南東隅付近に階段が3ヶ所描かれている。真ん中のものは、表御殿地区の地表面から、表御殿地区の南東隅にある「御櫓」に直接上がるための階段であろう。

その北側の階段は、「御書院」の南側の同じく地表面から石畳上に建つ多聞櫓に上がるためのものであろう。詰ノ丸地区から石畳へ上がる階段は、石畳を掘り込むような形で築かれていた。しかし表御殿地区のこの階段は外付けされている。これは、乙本に示されているように、表御殿地区の石畳の上に多聞櫓が建っていたからと推定される。だとすれば逆に、詰ノ丸地区の石畳の上には、

多聞櫓のような建築物が建っていなかったことを示すのであろう。

3ヶ所の階段のうち南側の階段も外付けであるという表現になっている。ここは石畳の上に、石畳の幅より狭い幅の多聞櫓状の建物が建っていたようだが、それが理由で、詰ノ丸のような掘り込み式ではなく、外付け形式が採用されたと考えておきたい。

なお、甲本では、3ヶ所のうち、北側の階段が、階段表記になっていないため、どのような構造物かわからなくなっている。

③表御殿地区の西端にある門と、その内側の建物の配置は、他の門には見られないものとなっている。すなわち、西側から門を通過して、東の表御殿地区に入るとすぐ目の前に建物が建っている。この建物を左へ避けて北側から回ったとも考えにくいので、この建物の中か下を通過して表御殿地区に入るようになっているのだろう。

### 4. 大手地区から「桜御門」へ

①大手地区の西南隅には「御櫓」が建っている。その北側の石畳上と、東側の石畳上に「多門(多間)」(多聞櫓)が建っていることも示されている。二つの「多門」は、いずれも石畳の幅より狭い幅の建物となっており、石畳上の内側にも外側にも細い空地がある。これは表御殿地区南東隅の「御櫓」から西へつながる建物とのちがいを示している。

②「桜御門」と、その前面にひかえる「御門」との間に、「長サ十間半」の建物があり、「コシカケ」との表記をとる。これは「腰掛け」であり、ここまで貴人(大名など)の御供をしてきた家臣(下級家臣)が城内に入ることを許されず、待っているための施設であろう。あるいは、城内にすぐ入ることが許可されなかった来城者が、許可が出るまで待つための施設であろう。この建物の北端には便所2個口が備えられている。

これに似た施設が、大手地区から表御殿地区へ入る門の外側北脇にも認められる。こちらは建物の説明表記を欠くが、同じような「コシカケ」施設であろう。「桜御門」から入城は許されたが、表御殿地区から先の城郭中枢部に入ることを許されなかった者。あるいはその許可を待つ者のための施設であろう。便所も付属しているように見える。このような「コシカケ」建物をともなう門は、以上の二ヶ所に限定される。

こうした形式で貴人が武家の本拠に入ってゆく作法は、室町殿(室町将軍の御所)でも確認され、『洛中洛外図屏風』では、室町殿門外や、邸内の各所にたむろする家臣・従者たちの姿が描かれている。豊臣秀吉の大坂城がそうした儀礼を踏襲する構造をもっていたことがわかる。

一方、「コシカケ」施設は、極楽橋から詰ノ丸にいたるルートには設けられていない。これは、この北側ルートから、秀吉に臣従する大名や家臣が（正式に）出入りすることを想定していないことを示すのであろう。室町殿の場合、大名や家臣が出入りする烏丸通とは反対側の室町通には、唐門や四脚門といった格式の高い門が設けられており、天皇の行幸や将軍の御成（外出）専用であったと言われている。もし、これがそのまま適用できるならば、極楽橋ルートは秀吉が出入りに使用したのかもしれない。

③「御門」について、いま一つ知見を記しておきたい。

「桜御門」がある南からのルートで詰ノ丸に近づく場合、かならずといってよいほど、各「御門」の内と外に「番所」が立地する。

「桜御門」の南に位置する、城外から入るための最初の「御門」の場合、門の内と外に番所が設けられている。これに次ぐ、「桜御門」では、「御櫓門」の南袖に「御番衆居所」が設けられるとともに、門内に「番所」が置かれていた。大手地区から表御殿地区に入る門では、門外の北側に、先述の「コシカケ」施設があるが、南側にも小さな建物が描かれている。これも門外の番所ではなかろうか<sup>12)</sup>。同じ門の内側にも「番所」があった。

表御殿地区からは、巨大な土橋を渡り、「御門」を越えて詰ノ丸地区に入ることになる。この「御門」の外側には「番所」があり、内側には「鉄砲衆番所」が置かれていた。そこから詰ノ丸に入るためには、櫓門形式の「御門」をくぐる必要がある。この門の内側には、「馬乗同心番所」があった。

他方の北ルートでは、極楽橋の南たもとにある「御門」の内には「番所」はない（極楽橋の外側は描かれておらず、番所があったかどうかは不明）。山里曲輪から詰ノ丸にあがる階段の途中に「御門」があり、その近くに「馬乗同心番所」がある。ただ、城外から入る極楽橋のあたりに、「桜御門」とちがって番所がない点は、日常的に極楽橋から入城する者は豊臣家家臣などに限られていて、「番所」で見張っている必要がないことを示しているのではなかろうか。一方、「桜御門」から入る南ルートでは、入城する諸大名らに豊臣家の威儀を見せつける重要な要素として多数の番所が活用されていたと考えておきたい。

④こうした視点からすれば興味深いのは、表御殿地区の南東隅の東側に位置する出入口である。本丸東側の巨大な堀と、本丸南側の「カラホリ」にはさまれた狭い土橋を渡り、右折して本丸に入る（ここには門がない）。そして、表御殿地区の東下の経路をかなり進んだあたりに遮蔽装置と番所があってようやくチェックされる。そこを抜けると、井戸のある曲輪に入るが、ここはもう中ノ段帯曲輪のすぐ南下である。ここから階段を二つあがる

と「御門」があり、その先に「番所」と「御蔵」がある。この南が表御殿地区であり、北へ、次の「御門」を抜ければ詰ノ丸地区である。

このルートで入城しようとするれば、表御殿地区南東隅の「御櫓」から監視され、その北側の多間櫓から側射されつづけるとはいえ、軍事的障壁はきわめてすくない。また日常的には、数少ない番所や門を経るだけで城郭中枢部に達することができる。途中の門も櫓門などではなく、簡易な冠木門でしかない。

想像をたくましくすれば、このルートは物資搬入に特化した経路であったのではなかろうか<sup>13)</sup>。それ故、「御門」を抜ければすぐに「御蔵」が位置している。そしてこの「御蔵」からは、表御殿地区にも詰ノ丸地区（奥御殿）にも容易に物資を持ち込めるのである（物資を「桜御門」から搬入すれば、表御殿地区を経由しなければ詰ノ丸地区に搬入できない）。きわめて合理的に搬入ルートを設定しているといえよう。このように考えれば、表御殿地区から詰ノ丸地区にいたる土橋という、軍事的にきわめて重要なはずのポイントに「御蔵」を設けている理由も説明できるだろう。

## まとめ—「豊臣時代大坂城指図」の評価

以上、「指図」の詳細にこだわり、十分な整理もないままに叙述してきた。最後に、これらをまとめてどのようなことが言えるのか簡単にふれておきたい。

まず、甲本と乙本を比較した場合、乙本のほうがより元図に忠実であることは明らかであろう。乙本にはあるが、甲本にはない記述・描写が多くあったし、両図をくらべれば乙本のほうが正確な描写だと認められる箇所も多くあった。

但し、甲本と乙本は同じ元図を筆写していることもほぼまちがいない。なぜなら、明らかに誤っている描写が何ヶ所か、両図に共通して見られるからである。つまり甲本・乙本の元図の段階で少なくない誤りがふくまれていたことになり、この元図もよりオリジナルな図面を写したものであることがわかる。とはいえ、そのオリジナルな図面が、本当の意味で原図であったのかどうか。それも原図を書写したものであったのかは不明である。

門、番所、「コシカケ」などの配置をもとに、本丸中心部にいたる3本のルートの性格のちがいについても試論を示した。「桜御門」から大手地区、表御殿地区を通過して詰ノ丸地区（奥御殿）にいたるのが、大名らが登城する際の公式のルート（大手）だったのであろう。途中、「桜御門」や詰ノ丸入口で2回も櫓門をくぐり、また巨大な土橋などを渡らなければならない。一方、極楽橋からの北ルートは、詰ノ丸に北西部から入るところこそ複

雑な構造になっているが、門や番所も少ない。いわゆる搦手だったのだろう。さらに南東からの第3ルートは軍事的なチェックも甘く、日常的な物資搬入ルートと想定した。

もしこのような登城ルートの使い分けが本当になされていたのであれば、豊臣大坂城の性格の一端を特徴づけることになるだろう。大手ルートは軍事的に嚴重な構成となっているが、数百メートル東に「物資搬入」ルートも存在し、こちらは軍事的には甘い構成である。だとすれば、大手ルートの厳しさは、むしろ城主の威儀を見せつけるための装置としての側面のほうが軍事面より大きかったのではないかと推量される。

中井家につたわる「豊臣時代大坂城指図」と同じ構図の本丸図は、他に「城塞釋史所収本丸図」、「諸国古城之図所収図」などがある。中井家の絵図がそれらの中で最も正確であることは間違いない<sup>14)</sup>が、文字情報について丁寧な比較をすれば筆写の系統だけでなく、豊臣期大坂城そのものに関する新しい知見も得られるのではないかと思われる。そうした研究の展開については他日を期したい。

#### 【注】

1. 調査成果については、市川・仁木・森 2019 にて公表予定。
2. 中井家の絵図類は数ヶ所に分かれて架蔵されているが、本「指図」は大阪市立住まいのミュージアムで整理・公開されており、重要文化財指定を受けている。宮上 1967 では、甲本を「ロ図」、乙本を「イ図」とする。北垣 1975 では、甲本を「B図」、乙本を「A図」とするが、本稿では、重要文化財指定の名称にしたがって甲本・乙本で統一する。
3. 宮上 1967 では、「指図」甲本・乙本に共通する「第2原図」があり、それは、オリジナルである「第1原図」をもとにした写本であるとしている。本稿では、この「第2原図」のことを「元図」と呼ぶ。
4. 宮上 1967、北垣 1975 では、トレース図上に一部の文字を貼ったり、別表上で文字表記を示したりしているが、トレース図の上にすべての文字を貼ることで、「指図」の全体を一目で見渡せるような工夫がなされたことはない。
5. 甲本・乙本の写真版については、谷 2003 の他、多くの出版物に掲載されている。
6. 市川ほか 2019 による。
7. 宮上 1984・1994。

8. 宮上 1984 は、甲本・乙本の赤線は木製の部位をも示すとし、この赤線部分は天守閣の建物(木製)が直接地面に接していることを示すと考えている。一方、佐藤大規 2011 は、赤線は筆写ミスがある可能性があると述べている。筆者も、本来は黒太線であるべきところを、甲本・乙本の元図が写し間違いをしていた可能性が強いと判断する。
9. 但し、この甲本のみにある位置の「石垣高六間」という表記は、『浅野文庫蔵諸国古城之図』所収の「撰津 大坂」の図にも見える。同図は中井家蔵「指図」とは系統を異にする写本と考えられていることから、甲本をふくむ書写の系統関係は、宮上 1967 が想定した以上に複雑である可能性がある。
10. 宮上は、宮上 1984 によると、中ノ段帯曲輪南端のこの付近が急斜面になって落ち込んでいたと解釈しているようであるが、無理であろう。
11. 但し、井戸のある曲輪と「中ノ段帯曲輪」の間の東西方向の境界線は、黒細線である。ここには石垣があったはずなのに黒太線になっていない。これらのことを勘案すると、この部分の描写、あるいは書写をめぐるはもう少し複雑な事情があったのかもしれない。
12. 宮上 1984・1994 ではこの小さな建物を「唐門」としているが、根拠は不明である。
13. 宮上は、この経路は、万一の場合、城主が脱出するためのルートだとしているが、信憑性に欠ける。
14. 宮上 1967。

#### 【引用・参考文献】

- 市川創・仁木宏・森毅 2019 「豊臣期大坂城本丸の復元について—サウンディング調査の成果から—」『ヒストリア』277
- 北垣聰一郎 1975 「いわゆる『豊臣時代大坂城本丸図』について」『大坂城天守閣紀要』3
- 北垣總一郎 1982 「豊臣時代大坂城『本丸図』と『真田丸』について」岡本良一編『大坂城の諸研究』日本城郭叢書 8、名書出版
- 桜井成広 1970 『豊臣秀吉の居城』大阪城編、日本城郭資料館出版会
- 佐藤大規 2011 「豊臣大坂城天守の復元的研究」『史学研究』270
- 谷 直樹 2003 『大工頭中井家建築指図集』思文閣出版
- 宮上茂隆 1967 「豊臣秀吉築城大坂城の復元的研究」『建築史研究』37
- 宮上茂隆 1984 『大坂城 天下一の名城』日本人はどのような建造物をつくってきたか 3、草思社
- 宮上茂隆 1994 「豊臣大坂城本丸復元」他『大坂城』歴史群像名城シリーズ①、学習研究社

#### 【付記】

指図のトレースは、市川創氏(大阪府教育庁)にさせていただいた。末筆ながら御礼を申し上げます。

# Notes on the Instructions for Osaka Castle in the Age of Toyotomi Hideyoshi (Nakai Family Archive)

Hiroshi NIKI, Seima YAJI

“Instructions for Osaka Castle in the Toyotomi Age” is the only accurate illustrated historical source depicting the central keep of Osaka Castle during Hideyoshi’s time. Along with reconstructing the drawings in those instructions, this article faithfully reproduces the written notations as well. Moreover, in comparing the two types of instructions used in construction and explicating the castle structure as defined in the instructions, this article gives some insight into the characteristics of Osaka Castle in Hideyoshi’s time.

Keywords : Toyotomi Hideyoshi, Osaka Castle, castle structure, instructions, Nakai family